

## 精神分析と哲学

平井邦男

### 1

現代哲学の教祖的存在であるルードヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインは、哲学について一風変わった見解を抱いていた。人が哲学を必要とすることは不幸なことである。日常的生の次元で、幸福である人にとっては、哲学など何ものでもない。哲学は現実生活の中で何らかの困難、何らかの問題状況に陥入った人にしか意味はない。哲学とはいわば「精神の治療法」であり、哲学の目的とは、彼の言葉を用いるならば「ハエにハエ取り壺から脱け出る道をさし示すことである。」

日頃、我々は生の世界において、生活のため、あるいは遊びのため、あるいは権力や愛の獲得のために様々な行為を行っている。行為は本来「賭け」であろう。我々はつねに予測不可能なリスクにさらされながら、ゲームを行っているのである。この段階では哲学は無用の存在である。人はただ目的達成のために、あれこれの計算や掛け引き、即ち戦略戦術を練っておればよいだけである。しかし、健康な人も時には病気になるように、人はつねにこの生の世界のゲームに熱中できるとは限らない。むしろ大抵の場合、そこから逸脱する。そして、いわゆる形而上学的問いを発したりするのである。これが我々のいう問題状況に陥入った状態である。この状態はヴィトゲンシュタインに言わすれば、ハエがハエ取り壺に入った状態であろう。哲学の目的は一度入ったハエ取り壺からハエを脱出させることである。そして、人を再び現実の行為に向わしめることである。そのためにはどうすればよいのか？ ヴィトゲンシュタインによれば、分析、すなわち言語分析を行い、事態を明確に整理すれば足りるのである。

古来、哲学のすべての問題は言語の誤った使用法、言葉の混乱に由来する、とヴィトゲンシュタインは言う。ここから彼一流の言語哲学が導

き出されるのだが、今は深入りするまい。言葉の意味とは言語におけるその用法である。言葉を話す時、我々は言語ゲームを行っている。ゲームには一定のルールが必要である。我々は暗黙のうちにそれらを了解している筈である。ところが、言葉はきわめて多義的である。それは生き物のように生きている。そこで、ルール違反を犯すことがしばしば起るのである。哲学上の難問はこのルール違反の産物である。サッカーのルールでフットボールをやるようなものである。こうして交通整理としての言語分析が必要となるのである。

哲学者はいわば「精神の医者」である。哲学の諸問題は治療を必要とする症状である。哲学者は言語分析というメスをふるい、症状そのものを解消してしまわなければならない。ハエは出口を見つけて脱出するであろう。病人は健康になり、再び生の世界での諸活動をはじめらるう。こうして哲学者は「哲学」を解消するというパラドキシカルな仕事を行っているのである。ヴィトゲンシュタインは言っている。「人は、はしごをのぼりつめたときには、それを、いわば投げ捨てなくてはならない。」病気がなくなれば、医者は不要である。

ところで、このような精神の医者という観点、そして分析という方法論はヴィトゲンシュタイン以前に、フロイトによって採用されていたものでもある。哲学をヴィトゲンシュタインのように解釈すれば、フロイトの精神分析は決して哲学とは無縁ではない。むしろ精神分析は言語分析とやらんで哲学の主要な方法となるのではなからうか？こと人間の問題に限る限り、論理分析よりも心理分析が有力な武器となりはしないか？我々は以上の観点からフロイトの精神分析を哲学と結びつけて考察してみたいと思う。とくに、我々は精神構造に関するフロイトの所説に焦点をあてて研究してみよう。

## 2

フロイトの精神分析の出発点であり、人間学における彼の功績の最大のものは、無意識の発見であろう。勿論、彼以前にも無意識の存在に気が付いていた哲学者は何人かはある。ライプニッツはすでに我々の感覚は我々に無意識な微少表象から構成されると説いていた。また、ショウペンハウエルの「生きようとする盲目的意志」(Blinder Wille zum Leben)、ニーチェの「力への意志」(der Wille zur Macht)は、行為の無意識的な真の動機について語っていた。しかし、無意識の存在を最も強力に主張し、そしてそれを多くの観察や経験的材料によって実証し、無意識の存在を前提にして研究を進めたのはフロイトだけであった。フロイトは無意識の発見者である、と言っても過言ではないだろう。

この無意識の発見が如何に画期的な事件であったかはいくら強調しても足りないだろう。フロイトの立場に立てば、ほとんどの近代哲学がその前提を疑われることになる。例えば、デカルトの立場などがそうである。フロイト以前の多くの哲学者、いや現代の哲学者の如何に多くの者が、デカルトのコギト (Cogito) の呪縛にとらわれていることであろうか。デカルトにとって「自我」は「考えるもの」であった。精神とはすなわち意識性であった。行為の主体は自我であり、そして自我の本質は思惟である。このデカルトの前提が自明の真理として通用していたのである。それは近代哲学の大きなドグマの一つである。カントは言っている。「『われ思う』はすべてのわたしの表象に伴っていなければならない。』」また、フッサールの現象学はコギトの自明性から出発している。そして、現代の実存主義者サルトルも同様の前提から論を展開しているのである。すなわち、彼は人間存在を「対自存在」(être pour soi)としてとらえ、その本質を志向性をもった意識としている。それは、サルトルによると「己れがそうでないところのものであり、己れがそうであるところのものではない存在」(être qui est ce qu'il n'est pas et qui n'est pas ce qu'il est.)である。この前提から、人間存在の脱自性、或は自由等々がうんぬんされるのである。こうしてみると、デカルトの立てたドグマの影響はいまなお歴然としている、といわねばならない。

フロイトは、この自我⇨精神⇨意識性という伝統的思考の枠組に爆薬を仕掛けたのである。彼は自らをコペルニクスとダーウィンに並ぶ第三の偶像破壊者と見なしている。無意識の発見、それはカントならぬフロイトのコペルニクスの転回である。人間は自惚れ易いものであり、とかく自己を中心に物事を考え易いものである。科学史においてこの自惚れに冷水を浴びせたのは、まずコペルニクスである。彼によって地球は宇宙の中心ではなく、広大な宇宙の片すみのちっぽけな存在にすぎないと知らされたのである。次に、ダーウィンが生物界における人間の特権的な地位を無に帰した。バイブルにある人間創造の神話は打ち破られた。人間はもはや神の似像として創られたのではなく、生物の進化の途上に発生したものである。その本性の動物性は消し難い。そして「人間の誇大癖は、三度目の、そしてもっとも手痛い侮辱を、今日の心理的研究によって与えられるのである。」とフロイトは言っている。彼は続ける。「この心理学的研究は、自我は自分自身の家の主人などでは決してありえないし、自分の心情生活の無意識に起っていることについてもごくわずかな情報しか与えられていない、ということをも証明しようとしているのである。」無意識の発見は、従来の自我概念の破壊をもたらすのである。

自我は我々の行為の真の主体ではない。行為の主体は我々には意識されざる何者か、Xである。フロイトは後にそのXにドイツ語の非人称代

名詞のエス (Es) をあてている。エスが本当の行為の主体である。それは通常我々には知りえない無意識の存在である。我々の人格の本体は自身にも分らない闇である。この主張は意識の明晰判断性を依り拠とするデカルト哲学に対する痛烈なアンチ・テーゼである。

フロイトはこの無意識の本体エスをはじめは恐る恐る仮定し、そして最後には、様々の証拠によってはっきりと確信するようになった。それは、催眠術の見学、夢の研究、しくじり行為の解釈、そしてとりわけ神経症の治療などによってもたらされたのである。若きフロイトにとっては、フランス留学中にシャルコーおよびベルネイムの催眠療法を見学したことは、一つの開眼であった。とくに、後催眠暗示 (Posthypnotische Suggestion) の実験は無意識の存在を確信させるものとなった。それは例えばこのような実験である。被験者を催眠状態に導き、何らかの暗示を与える。例えば、目醒めて三十分後に窓を開けなさい、と命令する。そうしておいて、長い時間の後に被験者を目醒めさせる。彼は意識を回復するが、命令については何も憶えていない。ところが、三十分ほどたつと、彼は落ち着きを失い、そわそわとしはじめ、例えば呼吸が苦しくなったと言いながら、命じられたとおり窓を開くのである。彼は意識の上では催眠状態の暗示を何も覚えておらず、自発的に、自己の欲求にしたがって窓を開いたのだと信じている。そしてその行為に理窟が立つようと、合理的な理由を考え出している。このような実験を目撃してフロイトは、自己とは一体何であるのか?と問うたのである。我々に様々な行為を行わしめている主体は何であるか、と。被験者自身は、呼吸が苦しくなったから窓を開けたのだ、と信じている。しかし実際は、彼は暗示を実行したのにすぎない。彼の行為は彼自身には意識されざる力、すなわち無意識の欲求によって行われたのである。フロイトはこうして無意識の存在に注目する。そして次のように説明しようとする。我々の行為の主体は無意識の本体エスである。意識的な自我は無意識という氷山のほんの一角を占るにすぎない。自我は自己の行為にもっともらしい説明をつけ、合理化 (Rationalisierung) するが、行為の真の動機は別にある。それは我々に知られない X である。

無意識の仮定とそれによる行為の説明は、当然のことながら、徹底的な心的決定論をとることになる。フロイトの立場は完全な決定論である。意識では何げなく、偶然のように行った行為でも、無意識の存在を前提すると、それらは有意味で、決定された行為となる。たとえば、ちょっとした間違いや癖、一見無意味に見える夢や幻覚や空想などは、精神的には十分合理的に意味付けされて解釈できるのである。

さらに、フロイトの観点からは幼年期は特に重要な意味をもつ。後年の行為は幼年期を探ることによって解明される。幼年期は一生を決定するのである。幼年期はいわば催眠状態である。この時、暗示され、教え込まれた事柄は、後催眠暗示の命令のように作用するであろう。すなわ

ち、本人は意識しないが、大人になり、催眠状態から醒めた人間をも実際には動かしているのである。幼年期の教育の重要性がとかれるのも故なしとはしない。

以上述べてきたように、フロイトの無意識の発見は哲学においても革命的な出来事である。現代の哲学はフロイト抜きで語ることはできないであろう。東洋においては、無意識は古くから知られてはいた。仏教の唯識論では十二処、即ち眼耳鼻舌身意の六根と色声香味触法の六境の上に、第七識としての末那識、第八識としての阿羅耶識、第九識としての菴摩羅識などを数えている。また密教では第十識として一切一心識まである。第七識以上は無意識と考えてさしつかえあるまい。ただ、このようにその存在は知られていたが、誰一人としてそこからフロイトのような体系を築き上げた者はなかった。フロイトこそ、彼自身自負しているように無意識の発見者といってもよいのである。

## 3

では、エスとは如何なる特性をもっているのか？ フロイトの見解はこの点については「快感原則の彼岸」（一九二〇年）を境いに大きく変化している。我々はいま彼の後期の思想のうち、哲学に関わりのあるものだけを選び出して検討してみよう。

フロイトは、無意識の本体エスを一言にして「渾沌、沸き立つ興奮に充ちた釜」と呼んでいる。エスは本能のたまり場である。そこはもろもろの衝動でたぎっている。さて、哲学的にみて興味深いのは、そのエスの諸過程には「論理法則」が通用しないということである。殊に「矛盾律」は適用されない。エスは矛盾に満ちている。エスには称々な方向とエネルギーを持った衝動がひしめいているが、それらは互いに没交渉である。反対の動きが並存し、互いに差し引き零ゼロになったり、一部を取り合いしたりすることなく、無秩序のままに存在している。「エスの中には否定と同列に置き得るようなものは何もない。」全くの渾沌である。

さらに興味深いのは、無意識の事象には「時間が無い」ことである。このことは哲学的に重要な問題を含んでいる。カントによれば、時間と空間は我々の直観形式（Anschauungsform）である。我々の心理現象には時間性と空間性は、必然的に、ア・プリオリに付着していなければならない。しかし、フロイトによると、エスには時間観念に相当するものは何も見出されないのである。「それは時間的に、秩序づけられていない。経過する時間によって変更されないし、要するに時間との関係をもっていないのである。」フロイト自身、カント哲学を意識しながら次のよ

うに述べている。「ですから、空間及び時間は我々の精神的行為の必然的形式であるという哲学者たちの命題の例外をそこに認めて驚かされるのであります。」エスには時間がない。時間観念は無意識ではなく、意識においてはじめて生じる。それはア・プリアリに存在するのではなく、ア・ポストテリオリに形成されるのである。

無意識はまた善悪正邪の観念をまったく知らない。即ち、無道德的である。無意識を支配する法則はフロイトの用語でいえば、快感原則 (Lustprinzip) である。エスは無条件で快感を目指している。それ以外の目標は何もない。

ところで、快感とは一体何であるか？ 如何なる状態のときに我々は快を感じるのか？ フロイトはフェヒナー (Th. Fechner) の恒常原則 (Konstanzprinzip) を採用する。すべての生体はある一定の安定状態への傾向を持っている。いま流行の言葉でいえば、ホメオ・スターシスへの傾向である。この傾向にさからって、ある限界をこえて興奮量が増大すると、我々は苦痛を感じる。快感はこれと逆の運動、即ち、興奮量が減少するときに感じられるのである。快感原則とは興奮の量をできるだけ低く保とうとする力である。無意識が快感原則に支配されているというのは、衝動が自己を解放しようとしてひしめいているということである。

エスの中にある衝動は、まず第一にエロス (Eros) である。フロイトは初期には性の欲動と自我欲動を対立させていたが、後期にはそれらの対立は止揚され、一つの生の本能＝エロスとしてまとめられた。そして、恒常原則の考察から新たに「死の衝動」 (Todestrieb) が考えられ、それがエロスに対立させられたのである。死の衝動あるいは破壊衝動 (Destruktionstrieb) は、普通ギリシア語でタナトス (Thanatos) といわれる。無意識にはエロスとタナトスが共に存在しているのである。

「死の衝動」の構想は哲学的に大いに問題のあるところだろう。その点を少しみてみよう。生命は、先に述べたように「安定性の傾向」 (Tendenz zur Stabilität) を持つ。興奮量を減少させ、恒常状態をたもとうとする。ところで、最も安定した恒常状態とは何であろうか？ それは死である。死んで無機物に還ること、これがすべての生体の目指していることである。そこでフロイトは言う。「あらゆる生命の目標は死である」 (Das Ziel alles Lebens ist der Tode.) 死の衝動とは生命の発生する以前の状態へと回帰したい願望である。或る時、この地球上に生命が発生したが、その時逆の力も働いたにちがいない、とフロイトは想像する。生命はより大きくなるとうという力によって促進されたであろうが、それと同時により小さくなるとうとする力、もとの何者でもない状態に戻ろうとする力が働いた。作用に対する反作用のような力である。同

化作用に対する異化作用のようなものである。この二つの力、すなわちエロスとタナトスが無意識の中で永遠の闘争を続けているのである。

この死の衝動という発想は熱力学でいうエントロピーの増大という思想と酷似している。熱力学第二法則は次のような宇宙観を呈示している。宇宙は次第次にエントロピーが増大してゆき、最後には熱死という平衡状態にいたる。これは一種の終末論的世界観である。さらに、最近のサイバネティックスでは、情報という概念を量化し、情報量  $H$  を  $H = -\sum_{i=1}^n P_i \log_2 P_i$  (ビット) という式で表わしている。  $P_i$  は事象  $P$  の確立変数である。この情報量の式は無秩序さの度合を表わしており、それは熱力学でのエントロピーと同様、孤立系においては減少することはほとんどない。フロイトの死の衝動はこれらの思想と同じ発想の上に立っている。生命体は、熱力学の立場からは、エントロピーの減少する特殊な現象だと考えられるが、その生命体の中にもエントロピーの増大傾向  $\parallel$  死の衝動が存在するわけである。以上のことを考慮に入れるならば、とかく問題視されるフロイトの死の衝動は、やはり一考に値する着想のように思われる。

フロイトは個体発生が系統発生を繰返すというヘッケルの思想に強く影響されていた。何故、各個体は進化の道筋を自ら繰返して経験しなければならぬのか？ それは、我々の内なる衝動がもとの状態に回帰したいと願っているからではないのか？ フロイトはこの衝動の回帰性を外傷的神経症 (Traumatische Neurose) の反復強迫や小児の遊びにおける繰返しの意味の中にみていた。こうして生の衝動に並んで死の衝動が構想されたのである。

この死の衝動が外に向けられると、それは破壊衝動或は攻撃衝動となる。相手をせん滅して無機物に返すこと、これが破壊衝動である。フロイトは第一次世界大戦の冷酷な事実を見て、破壊衝動の存在を否定することができなかった。彼は、いやいやながらこの衝動を提出しているようにも見える。この攻撃本能については多くの議論があるだろう。だが、いまは、我々はその存在を指摘するにとどめよう。

さて、要約してみよう。無意識の本体エスは、非論理的、無時間的、無道德的という特性をもつが、その内実は快感原則に支配された二つの本能、エロスとタナトスのあくことなき永遠の闘争である。以上がエスについてのフロイトの成熟期の思想である。

それでは次に、フロイトの目からは自我はどのように考えられるかをみてみよう。我々の精神の本体はエスである。エスは我々には直接的に意識されない闇である。自我はこのエスから派生して生れ、現実との接触によってエスの表面に堅い殻のように形成される。それは精神と外界の接点である。自我は外部世界から知覚として様々な信号を受け取る。そして衝動的に動くエスをなだめようとする。自我は現実原則 (Reality-

aspirinzip)に従うのである。我々は生きてゆくためには外界に自己を適応させなければならぬ。内的欲求はすべて満足させられるとは限らない。ある種の欲求は抑制され、またある種の欲求は満足を延期させなければならぬ。すなわち、現実の刻々とした変化につれて、衝動を制御することを学ばなければならないのである。学習過程が必要なのである。自我の制御の法則が現実原則なのである。

自我はエスを制御しようとする。逆に、エスは自我を覆して、欲求を満たそうとする。両者は葛藤しているのである。フロイトはエスと自我の関係を馬と騎手の関係に比較している。「馬は運動用のエネルギーを供給し、騎手は目的地を定め、強い動物の運動を指導する優先権をもっています。しかし、自我とエスとの間には理想的にゆかない場合がありにも頻繁に起りまして、騎手は馬自身が行こうと思う方へ馬を向かわせなくてはならないのです。」フロイトがその治療に生涯を費した神経症とは、あばれ馬に下手な騎手が乗ることから起因するといえよう。そして、精神分析の意図は良い騎手を育てることを目的としているといえる。

自我は外界、エス、そして超自我(Uber-Ich)という三人の暴君につかえている。平常はこの三人の暴君の無理な注文と要求をなんとかかかえているが、時には失敗もする。その時、自我は「不安」を起こすのである。不安とはフロイトによると「危険に対する準備」である。自我は不安の感情を発することによって、身に危険の迫ったことを生体全体に告げているのである。「外界に対しては現実的不安を、超自我に対しては良心の不安を、エスにおける情慾の強さに対しては神経症的不安を起すのである。」この不安が高ずれば、人はノイローゼになる。すなわち、病気に逃げ込むのである。病気の状態はリビドーが対象に向わずに、ナルチシズム的に自我に逆配備されているのである。このリビドーの逆配備によって自我は自己を防衛しているのである。

精神分析の目標はこのあちこちから責めさいなまれるか弱き自我を強めることである。自我はエスという大海に浮ぶ孤島のようなものである。自我の領域を拡大しなければならぬ。フロイトはそれを干拓事業のようなものだと言っている。精神という暗闇の中に光の部分を殖やすこと、それが精神分析の仕事にはかならない。干拓によって自我の領域が拡大する。そうすれば「エスのあったところ、そこから自我が生ずるであります。」無意識の発見者フロイトは人もいうように「自我人間」であった。



フロイトの精神構造論は成熟した思想としては三機関説である。すなわち、我々の人格は、エス、自我、そして超自我の三つの領域から成り立っているとするのである。次に、超自我についてみよう。超自我とは何か？

超自我とは自我の理想像である。自我の一部が発達して超自我に成る。超自我は一度形成されると今度は自我を律しはじめる。それは価値体系であり、自我を律する規範である。一言でいえば、超自我とは良心 (Gewissen) である。それは自我に様々な禁止や理想を課し、それにそむいた場合、罪悪感で自我を罰するのである。超自我の問題は倫理の問題である。この点をくわしく考察するためには、我々はフロイトの価値観について知らなければならぬだろう。

人間生活の窮局の目的は一体何であろうか？ このような問いに対してフロイトはきわめて冷淡であった。我々はそんなことは何も知りはない。我々の知っているのは、現実生活の中で自分が何を望んでいるか、ということだけである。我々は誰でも自己の幸福を願ひ、それを達成しようとして苦闘している。フロイトはここで月並みな「幸福」という語をいささか懐疑的に出すだけである。ところで、幸福とは積極的には快感の体験であり、消極的には苦痛の回避である。人はその資質によって積極的にも消極的にも生きられよう。フロイト自身はショウペンハウアー同様ペシミストであった。彼は快感の獲得よりは苦痛の回避を重視した。快感とは満々とせきとめられた衝動が突然満足されることであるが、その性質からいって、それはただ人生の「挿話的現象」でしかあり得ない。快感だけをいつも期待することはあきらめなければならぬ。それは欲求の不満足状態に苦痛が先行してのち訪ずれるものだからである。彼はゲーテの言葉を引用している。「よき日々の連続ほどに耐えがたいものはない。」何故ならば、「快感原則によって切望されている状態が持続するときはいつも、生ぬるい快感が生ずるにすぎない」からである。我々はむしろ苦悩の回避を心掛ける方が賢明であろう。

苦悩は三方から迫ってくる。まず、自分自身の肉体の弱さから生ずる苦悩、つぎに外界から来る苦悩、最後は他の人間との関係から生ずる苦悩である。これは自我の三人の暴君に対応している。これらの苦悩に耐えるためには鎮痛剤なしではすまされないだろう。それには次のようなものがある。「われわれに自分たちのみじめさを軽く見させる有効な気ばらし、みじめさを減少させる代償的満足 (Ersatzbefriedigung)」、みじめさに対してわれわれを無感覚にする麻薬である。」これらのうちどれかは必要である。しかし、我々は如何に様々な処世法を用いたとしても、苦痛から完全に逃れえないであろう。フロイトは決して気安めを言わない。

結局、積極的にしろ、消極的にしろ、幸福への努力は「個人的なりビド―経済学の問題」である。フロイトはつきはなしたように次のように言う。「ここには、すべての人に役立つような方法はない。各人が、どういう独特の流儀で幸福になりうるものか、自分でためしてみなければならぬ。」そして、慎重に次のように忠告する。「用心深い商人が、自分の全資本を一個所に固定することを避けるように、生活の知恵もまた、たったひとつの努力からあらゆる満足を期待しないようにとすすめるだろう。」これはフロイトの本音であろうか？

ところで、我々は現代人としていわゆる文化的な生活を送っている。文化はフロイトの定義によると苦悩回避の一方法である。それは「自然に対する人間の防衛と人間相互の關係の規制とに役立っている成果と制度の総和」を意味する。さて、この苦悩に対する自己防衛である文化が、逆に人間にとつ苦悩の源泉であるとすればどうであろうか？ 苦悩を回避しようとして苦悩に陥入っているとすれば……。十八世紀において、ジャン＝ジャック・ルソーは大声で叫んでいた。諸悪の根源は文化にある。我々は文化を放棄すべきである。それを原始状態に戻してみるならば、我々ははるかに幸福になるだろう、と。一体、この文化の中の居心地悪さはどこから来るのか？

文化は自己の維持のために、我々の衝動を抑圧する。そこに不快の源泉が存在する。我々のエスの中にはエロスとタナトスという二つの本能がうごめいている。文化はこの二つともに禁止をかけるのである。即ち、文化のかかげる要求は、一つは性欲の制限であり、他は、攻撃本能の制限である。文化は文化である限り、この二つの制限を是非とも行わねばならない。そうでなければ、文化は死滅する、とフロイトは言う。

先に述べたように、幸福とは積極的には快感の体験である。そして、その中で最も強い快感を与えるのはエロスである。フロイトによれば、幸福の原型であり、他の快感の現実的な基底となるのは、性器的愛 (genitale Erotik) である。それは最強度の快感を我々に与える。その他の愛の形態は、いわゆる「目的阻害を受けた愛」 (zielgeminte Liebe) である。両親と子供、あるいは兄弟姉妹のあいだにある情愛 (Zärtlichkeit)、友人たちの友情 (Freundschaft) などは目的を阻害された愛の典型である。文化は自己のためにこの目的阻害を受けた愛を最大限に利用する。また、いわゆる昇華 (Sublimierung) を行うためにも文化は性欲を制限せざるを得ない。

エスの中のもう一つの衝動、即ち破壊衝動も自己の願望を満足させたいと思っている。フロイトの人間理解は決して甘くはない。彼はむしろホップスの徒である。人間は人間にとって狼である。(Homo homini lupus.) 人間は、本来、攻撃されるとせいぜい自己防衛するようなやさしい存在ではない。隣人とは彼にとっては一つの誘惑である。「つまり、その隣人に攻撃を加えて満足し、その労働力を補償もなしにこきつか

い、それを同意も得ないで性的に利用し、そのもちものをうばってしまい、またそれを辱めたり、苦痛を与えたり、拷問したり、さらには殺してしまおうという誘惑なのである。」フロイトは人道主義者によって否定されがちな現実の一面を見すえていた。文化はまたこの破壊衝動にも制限を加えなければならない。

我々の内にある二つの本能に制限を加えること、それが倫理の役割りである。その最初の形態はトーテミズムに代表されるタブー道德である。トーテミズムとは、特定の動植物(トーテム)を自己の血縁集団の類縁として扱い、それを崇め、それにまつわるタブーを掟として守る風習のことである。多くの未開民族にみられるこの風習にフロイトは宗教、法、道德の萌芽形態を見ていた。トーテミズムの本質をフロイトは次の二点にまとめている。(1)トーテムを殺したり、食べたりしてはいけない。(2)同じトーテムに属するものとの間の性交は許されない。つまり、殺人の禁止とインセスト・タブーである。この二つのタブーは何に由来するのか？

フロイトはそれを太古におけるエディプス・コンプレックスの結果であると考える。彼は奇妙な仮説を形成している。人間は太古においては原始群(Urhorde)をなして住んでいた。そこには一人の強大で、暴力的な原文(Urvaer)がいて、群のすべての女性を一人占めにしていた。息子たちはこの強大な原文を愛してはいたが、その嫉妬深さ故に憎みもしていた。つまり、原文に対して両価的な(Ambivalenz)態度を有していたのである。そしてある日のこと、兄弟たちは連合し、父親に對抗して、ついに父親を打ち殺して、食べてしまうのである。そうして父親によって独占されていた女性を分配したのである。この饗宴が祭りの起源である。ところが、こうして欲望が満たされると、次に深い罪悪感が生じたのである。というのは、彼らは父を憎んでいたが、また愛もしていたからである。父親殺しの事件によって、彼らはエロスとタナトスの両方の衝動を満足させたが、この罪悪感には悩まされたのである。そこで、彼らは以後こういうことは二度としないように約束した。そして、父をトーテムと同一視し、トーテムとして崇め、それを食べることと、同一トーテム内における性交を禁止したのである。これは息子が父親を殺し、母と結ばれるというギリシヤ悲劇のエディプスの立場と同様の過程である。フロイトは文字どおり、このエディプスのような事件が歴史上に何度も繰返されたと信じていた。

個人の成長過程においてもこのエディプス・コンプレックスは現われる。個体発生は系統発生を繰返す、というわけである。男児の場合、彼の最初の性的な対象は母親である。そして強大な父が対抗者としてあらわれる。子供はエディプス・コンプレックスの状態に陥入るのである。

ここから脱出するためには、子供はタブー道徳を身につけなくてはならない。彼は自己と父親を同一視し、父親の権威や命令を自己の中にとり入れる。こうして彼は、自我の一部を変形させて、自己の内に超自我を形成するのである。超自我とは自我の中の父親像である。それは自我に命令を与え、規範をもたらす。この超自我が衝動を制限するのである。文化には各々文化超自我が存在するであろう。それは我々に色々な禁圧を与える。我々は文化的になればなるほど、居心地悪く感じられるのは、この超自我が段々と大きくなり、それにつれてより多くの制限を課するからである。この超自我の抑圧があまりにも強すぎると、個人においては神経症、社会においては社会不安がぼつ発する。エス、自我、超自我の三者の調和こそ、あるべき人間の姿なのであろう。

## 5

以上、我々はフロイトの精神構造論をみてきた。ここで話を元に戻そう。以上のような仮説を採用する精神分析と哲学とはどのような関係があるのか？ この点について考察してみよう。

ヴィトゲンシュタインにとっては、哲学とは一度ハエ取り壺に入ったハエに、そこから脱出する道を教示することであった。ハエ取り壺の状態とは、無意味な形而上学的問いを問う状態である。世界とは何であるか？ 人間とは何であるか？ 人生如何に生きべきか？ 等々の問い、さらには、魂の不死や自由や神の存在などについての問いを発することは、正しくそれに当るであろう。哲学の役割りはそれらの問いの無意味性を知らせることにある。そうして、その問い自体を解消させ、人を再び現実の諸活動に連れ戻すことにある。

精神分析はこれと全く同じことを目指しているといえよう。フロイトはもともと医者である。彼の本業は病気で苦しんでいる人々の治療である。彼はつねに「ハエ取り壺のハエ」を相手に苦闘していた。フロイトにとってハエ取り壺に陥った状態は、神経症になった状態であった。精神構造論からいえば、自我が三人の暴君によって危機に瀕した状態である。神経症は内なる衝動がスムーズに満足させられず、強い抑圧をこらわった時に発生する。満たされなかった衝動は消え去ったわけではなく、代理的な満足を見出そうとする。この抑圧された衝動の代償的満足の行為が神経症の症状としてあらわれるのである。

ところで、先に挙げたような形而上学的問いを発することは、フロイトにいわすれば、一種の神経症である。人生如何に生きべきか？ とい

う問いの背後に、フロイトは現実において満たされない欲望、抑圧された衝動を認める。何故にそのような問いを発するのか？ それは彼が現実生活において不幸だからである。神経症患者と同様の状態に陥っているからである。ハエ取り壺に入ったからである。

このような問いに対して、最も一般的で、最も強力な解答を与えてきたのは、宗教である。宗教はそれを求める者になぐさめを与え、世界観を与え、規範を与える。信者はそれらを信用することによって、現実の不幸を忘れることができると思う。しかし、それはただの幻想にしかすぎまい。フロイトにいわすれば、宗教は集団神経症に他ならない。人は宗教に入ることによって、集団で神経症をあらわすために、個人的には神経症にならずにすむ。しかし、宗教は個人の神経症よりもたちが悪い。何故なら、それから治療することがないからである。宗教は不幸を再生産する。そうしておいて幻想的ななぐさめを与えるのである。それは正しくアヘンである。

プラトンによれば、哲学の源泉は驚きの感情であるという。ところで、驚愕とは人が無準備で危険におそわれたとき、陥入る状態である。この危険の不意打ちは外傷性神経症をひき起す。その場合、人は驚きを与えた事件即ち精神的な外傷を夢や幻などで何度も何度もくり返すのである。プラトンにとってはソクラテスの死がそのような外傷的事件にあたる。彼は対話篇で何度もソクラテスの言動を反復する。このように考えると、プラトンのイデア論も一種の外傷性神経症の結果だともいえる。

さて、これらの状態から脱するためにはどうすればよいのか？ どのような治療法があるのか？ 先に述べたように、宗教に入ってマスヒステリーに自己を解消させるのは決して真の解決ではない。むしろ、フロイトの扱った患者は大部分宗教の強い掟にがんじがらめになった人々であった。強すぎる超自我のために、わずかの衝動も抑圧してしまいう人々であった。病根は何処にあるのか？

フロイトに言わすれば、これらすべてのわざわいの原因は「無知」にある。ノイローゼは本来知っていなければならない心的過程に人が無知であるが故に起るのである。精神分析の方法はこの無知の状態に知をもたらすことを基本としている。事実、ノイローゼ患者は抑圧された無意識の衝動を意識すると同時に治る。「知」こそ精神分析の武器である。自己について知ること、即ち自己認識あるいは自覚こそその治療法である。

自己は我々が普通思っているほど明らかなものではない。それは暗い闇につつまれている。我々の行為の主体はその闇の衝動である。快感原則に従い、自らの願望の満足をひたすら願うエロスとタナトスの力である。それが現実との接触による現実原則、そして超自我の諸々の規範の

制約を受けて、変形されてあらわれるのである。すなわち、現実の行為はこれら三者の妥協的産物である。

神経症患者はこれらのメカニズムについて何も知らない。彼らはただ闇の衝動を恐れるのみである。恐れるが故に抑圧する。衝動の存在を知りたくないが故にそれらを無意識の中に沈める。こうして、結局、より苦痛な状態に陥入るのである。ここから脱出するためには事実を事実としてあるがままに受け入れること、すなわち冷静な「知」しかないのである。あるがままの現実があるがまま知った上で、適切な判断を下す、これ以外に道がないのである。

フロイトはペシミストであった。彼はニーチェと同様生きることは一つの悲劇であると考えていた。例えば、エディプス・コンプレックスはその典型的な例である。人は成育する過程で必然的に父母との愛情の三角関係におちいる。そうして、子供は結局のところ自己の願望をあきらめなければならない。これは人が生きなければならない一つの悲劇である。問題なのはその解決法である。ノイローゼになる人間は自己の中の欲望を決して認めない。彼にはそのような衝動があることがまんならないのである。それ故、彼はその欲望を抑圧する。無意識に沈めて、自分に気付かないようにする。そして、そのことによって症状をひきおこすのである。

精神分析の方法は患者に彼の衝動の存在を知らせることにその主眼点をおいている。そのために所謂「自由連想法」(freie Assoziation)を用いる。患者に思いつくままに様々なことを連想させる。医者はそれを聞き、解釈して患者の中の闇の衝動を指摘する。もし、患者が心からそれに納得すれば、症状は不思議にも消えるのである。今度は意識による衝動満足のあらためての断念が問題になるのである。もちろん、事態はそれほど簡単ではない。患者はあるがままの現実を知ることに対して出来るかぎりの抵抗(Widerstand)を示す。知ること自体が彼には苦痛なのである。彼は自己の中にそのような願望があること自体が許せないのである。精神分析の努力は、この抵抗を克服することに存している。

彼が衝動の存在を許せないのは強すぎる超自我のせいである。超自我にとっては、ある願望を持つことはその行為を行うのと同じ意味をもつ。超自我はたとえば次のように言うのである。「よこしまな心をもって女をみる者は、すでに心の中で姦淫を行ったのである。」このような観点からは衝動自体が悪になるであろう。それ故、衝動を抑圧するのである。

精神分析はこの強すぎる超自我をゆるめようとする。その際、精神分析の立っている前提は、或ることを意識することとそれを行為にうつすこととは別の事柄だという認識である。たとえば、或る人間を殺してやろうという欲望を持つこと、そしてそう言うことと、実際に殺人を犯す

こととは全然異ったことである。我々は或る欲求を意識してもそれをしないでおくこともできる。この場合は抑圧では決してない。欲求そのものは意識しているのである。この場合は知的な断念である。断念はいかに苦痛なものであっても、神経症の原因とは決してならない。自我がエスを制御していると言えるからである。精神分析はこの意識と行為のさげ目を利用するのである。患者にまず衝動の存在を意識させなければならぬ。そして知的断念を行わしめるのである。フロイトの思想は知行一致ではなく、知行分離である。事実と価値の積極的な分離、そして価値による行為の制御、これこそフロイトの目指したことである。それは科学一般のやり方でもある。こうして自我をきたえ、自我を強めることが精神分析の治療法である。我々のあるべき姿とは自我による無意識の支配である。悲劇を悲劇として認識した上で、意志と知性による処置を行うこと、それが望ましい姿であろう。フロイトは何よりも知を優先させる合理主義者であった。

さて、我々は以上の精神分析の治療法は、また、哲学の方法であるとも思う。形而上学的問いを発しそうになるとき、我々は自己診断を試みなければなるまい。「世界とは何であり、人間とは何であるか？」という問いは、何故に問わなければならないのか？ 多くの場合、そこには挫折した欲望、現実生活の不幸、或は未来への不安などが存在する。解決さるべきはそれら生レイベンス・ヴェルトの世界での諸困難である。問いの根源を認識し、それらの解決を計ること、これはハエ取り壺から脱出する道である。勿論、それらの困難が実際上思い通りにならないが故に人は問いを発するのである。しかし、形而上学的問いを発するや否や、人は二度と抜け出られない泥沼に足を踏み入れることになるのである。その泥沼から抜け出るためには、人類の英知がどれ程の苦闘を行わなければならないかは歴史の示すとおりである。現実の困難はこの現実の中で解決されなければならない。どれほど困難な戦いであろうと、我々は試合を放棄するわけにはいかないだろう。生きている、ということは試合を続行しているということである。そして、形而上学的問いを発することは、戦わずして白旗を出すことであろう。

哲学はもとは諸学の総称であった。そして科学の発達によってそれは「あらずもがなの屁理窟」、様々な世界観、様々なイデオロギーとなった。そしていまや、哲学は人類神経症の治療法である。その武器は言語分析と精神分析、一般的にいえば、論理と科学的知識である。この二つを手にして我々は暗闇を手さぐりで進まなければなるまい。

我々に与えられているのは時間だけである。限りあるこの時間をどのように使うかは、各人の問題である。人はそれぞれ独自の使用法を考案せねばならない。そして、最後に次のように言えれば幸いであろう。「これが人生か！ ならばもう一度！」